



2024年（令和6年）

1月号（No. 944）

公益社団法人

日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>e-mail ● jac-room@jac.or.jp

第四紀花崗岩の発見と 北アルプスの成り立ちの解明

秩父宮記念山岳賞受賞者 原山智

本年度の秩父宮記念山岳賞を受賞された。地質探偵ハラヤマ。こと原山智教授から本会報に論考が寄せられた。我々登山者にとつてなじみの深い北アルプスは、どのようにして誕生したのだろうか。地道な地質図作りから始まった調査研究からいかなる新発見があったのか。名探偵による謎解きを拝読しよう。

北アルプスでの地質調査

1981年に工業技術院地質調査所に入った私は、念願だった地質図幅の研究に取り組み、調査対象として5万分の1地質図幅「上高地」を選びました。地質図とは、

表土の下にある地層や岩盤を岩質と時代順に区分した図面で、地質図幅とは、緯度線と経度線で区切られた区画内の地質図面です。日本では産業技術総合研究所の地質

調査情報センターから発行されています。なかでも数百日に及ぶ現地踏査と室内研究を経て作成される5万分の1地質図幅は、地質情報に関する国土基本図と言うべき存在です。

「上高地」地質図幅は、90年に発行されました。「上高地」地質図幅に始まり「槍ヶ岳」（91年）、「立山」（2000年）と、北アルプスの中

軸部の地質図幅の踏査と出版が30

目次

第四紀花崗岩の発見と 北アルプスの成り立ちの解明	1
トリスリ川・シャプルベシから ガネッシュ・ヒマール南面をたどる	5
遥かなりアニデッシュ・チュリ ～2023年秋、明治大学山岳部登山 隊の記録～	8
山の名著再読	10
追悼 上高地の親父を悼む	12
支部だより	
東京多摩支部／東九州支部	13
図書紹介	15
新入会員	16
会務報告	17
ルーム日誌	18
会員異動	18
INFORMATION	18
編集後記	19

▶日本山岳会事務（含図書室）取扱時間
月～金 10～20時
第1、第3、第5土曜日 10～18時
第2、第4土曜日 閉室



写真1 金木戸川調査時の筆者（37歳ごろ）

40代にできたことは、その後の私の研究にとって非常に大きな財産となりました（写真1）。

82年から始めた「上高地」地質図幅では、85年までの4年間で300日近い野外踏査を行いました。まず登山道沿いの踏査から始まり、

バリエーション・ルートと冬山登山ルート、5～6月の残雪期の谷沿い踏査と進め、最後までどうしても必要な場合は、滝谷第1尾根や屏風岩1ルンゼなどの岩登りルートを、山仲間やガイドとともに登りました。こうした踏査ルートのうち、槍・穂高連峰一帯の地質踏査ルートを図1に示します。従来の槍・穂高連峰の地質図は、ほぼ登山道沿いのデータのみから作成されていたので、それに比べると格段の進歩だったと思います。

地質図幅「上高地」での発見

この地域は、日本最古の化石（約4億5000万年前）を含むオルドビス紀の地層や結晶片岩、ジュラ紀付加体堆積岩、白亜紀火成岩、焼岳火山など時代を異にする多種

多様な地質から構成されており、明治時代から多くの研究者が訪れていました。そうした研究の空白域を埋める踏査によって発見されたのは、笠ヶ岳と檜・穂高連峰に

あったカルデラ火山の存在です。両者はともに長い年月の侵食作用を受けて外輪山などの火山地形は失われています。しかし、形成時の断層によって囲まれた範囲内に、

3000mを超える分厚い火山岩層が見出されたことで、噴火の際に陥没を伴うカルデラ火山だったことが明らかになったのです。笠ヶ岳カルデラは白亜紀末68



図1 槍・穂高連峰一帯の地質踏査ルート

00万年前、槍・穂高カルデラは古第三紀(Rb-Sr法により約4600万年前と判断)と、形成に新旧があることも分かりましたが、後者の年代について、その後とんでもないドンデン返しが続いているとは!「上高地」地質図幅出版の90年当時は全く予想できなかったのです。この経緯を次に詳しく述べることにします。

第四紀花崗岩の発見

北アの研究では野外踏査とともに岩石の年代測定を行ないましたが、そこにとんでもない発見が訪れます。地球史の中で最も新しい第四紀(260万年前)現在の花崗岩の発見です。従来は山梨県の小鳥花崗岩が430万年前で国内最新記録を持ち、世界ではガダルカナル島イナム岩体が256万年前で最新でした。実は「上高地」地質図幅で報告した180万年前の滝谷花崗岩の年代値をあまりの若さに信じられず、再加熱などで起こる年代の若返り現象ではないかと疑っていたのです。

しかし、91年の2月、滝谷花崗岩の直上にあった槍・穂高カルデラの溶結凝灰岩と高山市近郊に分



写真2 80度回転したカルデラ湖の火山灰層。爺ヶ岳・白沢のコルにて

布する溶結凝灰岩が、色調が大きく違うにもかかわらず構成鉱物の化学組成が一致し、両者は同一のものであることに気がついたことからドンデン返しが始まります。槍・穂高カルデラから噴出した火山灰は、カルデラ内だけに溜まったのではなく、カルデラから40km以上離れた場所まで火砕流として流走していたことになります。後者は約250万年前の3つの年代値が得られていたことから、ようやく滝谷花崗岩が若いことに気がきます。今まで否定しつつも気掛かりであった若い年代値こそが、滝谷花崗岩の本当の年代だったと確信したときは、今までのモヤモ

ヤが霧散して地平線の彼方まで視界が開けていくような感覚で、発見の醍醐味を味わうことになりました。

花崗岩は地下3km以上の深さで、700℃前後の高温マグマから数十万かけてゆっくり冷え固まった岩石です。冷えただけでは地上で観察できないので、その一帯が隆起して地表までの岩盤が侵食削剥されないと地表に現われません。日本列島のここ10万年間の隆起沈降量は、山岳域を除けばほとんどの地域で1mm/年以下と言われています。仮に1mm/年の隆起量で、侵食量が0・7mm/年だとすると、地下深度3kmにあった花崗岩が冷却して地表に露出するまで500万年近くかかることになります。滝谷花崗岩のように200万年前より若い花崗岩が地表に露出していることは、とんでもない地殻変動、急激な隆起の場得上昇削剥された結果だと言えます。

若い花崗岩(第四紀花崗岩)の発見は多くの研究者の関心呼び、特に開発されたばかりの微小領域の年代測定法の挑戦的な研究対象(どこまで若い岩石の年代が測れるか?)として注目されました。新

しい年代測定手法は、ジルコンなどウランを微量含む鉱物を対象とし、数十ミクロンの範囲のウラン―鉛年代を測定することができると、日本でも2000年代から急速に普及し、今や年代測定的主流となりました。この間の多くの測定値は、滝谷花崗岩が160万年前、150万年前、120万年前、80万年前の繰り返しマグマの注入で形成されたことを示しています。

転倒カルデラの発見

この発見は、「立山」地質図幅を出版した直後の2000年の暮れに起こりました。卒論生の行なった火山岩類の地磁気記録の測定の結果を見ているときに、ブレイクスルーが生じたのです。火山岩では、約600℃まで冷却したときに地磁気の方位が岩石中の磁鉄鉱に記録されますが、その方位は現在と同じ正磁極期でも逆転磁極期でも、南北どちらかの方向に向いています。しかし、記録後に地殻変動による傾きや回転が生じれば、地磁気の記録は南北方向から大きくずれます。

地磁気記録の測定結果は、全て

の試料で南北線から大きく東にずれており、明らかに地殻変動により大きく傾いたことを示していました。この結果、大町市の西の白沢天狗山一帯に分布する火山岩が、ほぼ垂直に近い角度まで傾いたカルデラの火山岩層であることが分かったのです。西側に隣接し、五竜岳・鹿島槍ヶ岳から爺ヶ岳を経て蓮華岳に至る範囲の火山岩層もカルデラ火山の産物で、同じく垂直に近い火山岩層だと分かりました(写真2)。こうして東西幅5km以上にわたる範囲の火山岩層がほぼ垂直になるまで回転したことが判明したのです。しかも2つのカルデラ火山岩層の年代が120(200万年前を示すことから、第四紀の新しい地殻変動がこの地に生じたことを意味していました)。

また、カルデラ火山岩層の西に接し、黒部川に至る範囲まで広く露出する黒部川花崗岩は、カルデラ火山のマグマ溜まりが地下で固まった、非常に若い第四紀花崗岩であることが分かったのです。この黒部川花崗岩も年代測定を得意とする研究者に注目され、ジルコンのU-Pb年代は220万年前、130(100万年前、80万年前

北アルプス山脈を生んだ南北水平軸回転と隆起モデル 若い第四紀花崗岩の露出（140万年～60万年前）

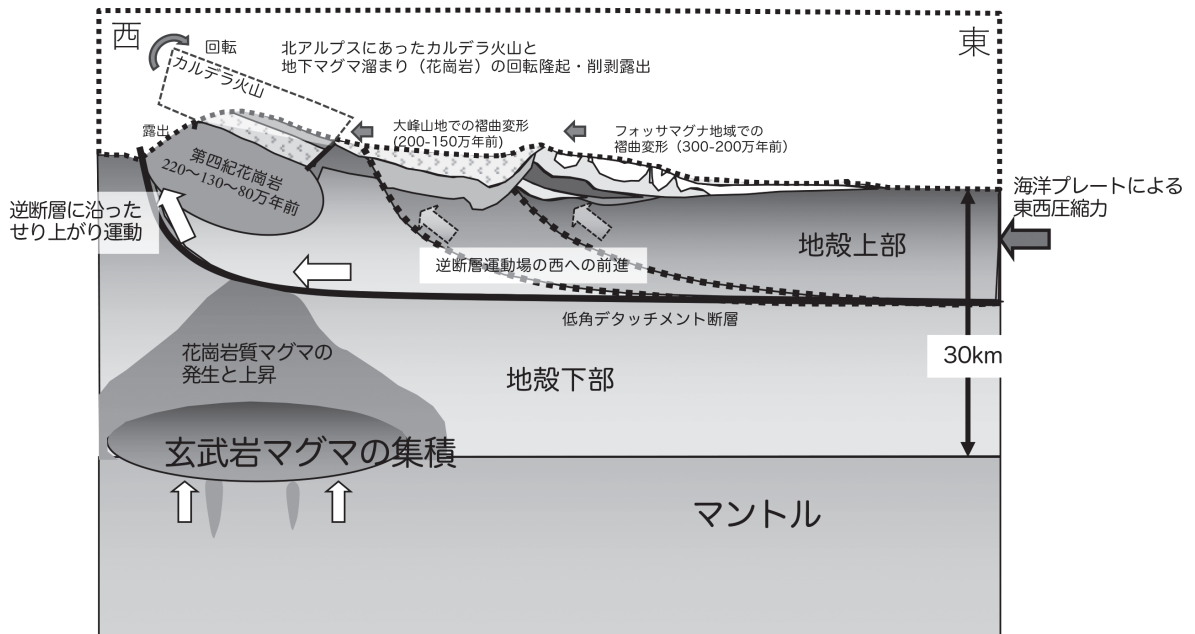


図2 北アルプス生成の東西モデル断面図

のマグマの断続的注入で露出面積100km²に達する巨大な岩体があったことが分かってきました。

滝谷花崗岩の年代問題で長らく悩んだ経験を踏まえ、爺ヶ岳・白沢天狗カルデラは220～80万年前の年代を示す黒部川花崗岩とともに、北アルプスの激しい隆起により南北水平軸回転（焼き鳥の竹串を回す動き）を行なったことにとどり着いたのです（図2）。こう

して日本アルプスの3つの山脈の中で最も古い生成（200万年前より古い）と言われていた北アルプスは、2つの若い第四紀花崗岩とカルデラ火山岩のセットの発見により、100万年前後に生じた激しい回転を伴う隆起で形成されたことが明らかになったのです。

山での調査研究の危機的状況

私の場合、20～30代のときにフィールドワークに徹する環境に恵まれました。特に工業技術院地質調査所では、知的好奇心に基づく探求を続けることができました。これは今思えば本当にありがたいことで、多くの同僚や上司はもちろん、そして送り出してくれた家族にも支えられていたのだと感謝

の思いが募ります。97年に信州大学に移ってからは、山岳に強い卒業生や修論生に恵まれ、徹底した踏査を続けることで北アルプス形成の新たなモデルを2003年には提唱することができました。やはり研究者にとつての最大のモチベーションは、未知の世界への挑戦であり、純粹な知的好奇心こそが重要だと痛感します。

一方、野外研究者は激減、仲間内では「ライチョウよりも厳しい絶滅危惧種」だと自虐的に評します。これは、研究の管理強化と研究評価基準の画一化が原因です。2004年に導入された国立大学の法人化は、基礎的で時間のかかる分野を財政的にも研究評価の面でも追い詰めています。こうした状況に若者は敏感で、「私の描く研究人生とは違う」と大学院博士課程への進学者の激減を招いているのです。日本の研究開発能力が低下している現状は、研究は管理と予算配分では推進できないことを示しています。為政者は「研究する心」に寄り添うところから再スタートすべきなのでしょう。

（信州大学名誉教授・理学部特任教授）

創立120周年記念事業

グレート・ヒマラヤ・トラバース／ステージⅣへ上

トリスリ川・シャブルベシから
ガネツシュ・ヒマール南面をたどる

藤井正善

G・H・TステージⅣは中央ネパールのガネツシュ山群／マナスル山群／アンナプルナ山群の踏破とナムン・バンジャン(峠)の調査が目的である。

期間…2023(令和5)年10月7日～11月25日

メンバー…重廣恒夫(76)、吉井修(62)、飯田邦幸(69)、藤井正善(76)

4回目となる踏査は、10月7日にカトマンズ入りし両替、食料や燃料などの購入を済ませて11日、チャーター・バスで3回目踏査終了点のシャブルベシ(1503m)に向かった。ガネツシュ山群は、ネパールと中国チベット自治区の国境に近い位置にある。街には東方のランタン・ヒマール方面に向かうトレッカーは多いが、シャブルベシから西方のマナスル方面に向かうトレッカーは少なく、途中で会ったのは3パーティ7人だけだった。

私がトリスリ・バザール／シャブルベシのルートを訪れるのは4回目であり、その変遷を述べることにしたい。1971年11月のランタン谷／ガネツシュ・ヒマールへの踏査時は、トリスリ・バザールの北方に位置するベトラワティがジープでの最終集落であり、そこからシャブルベシまで3日間の歩行を要した。また、79年12月にチリメ・コーラ(谷)に入ったときは、ジープがドンチエまで乗り入れ可能となり、ランタン谷が身近になった記憶がある。

シャブルベシ集落も70年代の面影は全くなく、大きな町に変わった姿に驚いた。昔は大きなゴンパの周りに50軒ほどの家があるだけの、こぢんまりした集落だったが、今やトリスリ川右岸には数多くのホテルが立ち並んでいる。この変遷は、シャブルベシ北方約15kmに位置する中国との国境ティムレまで開通した車道に起因していると



ユリ・カルカの手前にあったチーズ工場

推量する。

10月12日シャブルベシ／チャウラ
ツター

昨日は重廣隊長の誕生日(76歳)で、隊員やシェルパたちでお祝いをし心地良い睡眠をとり、今朝は爽やかに目覚め、8時過ぎに歩行開始。出だしは車道を少ししたどるが、10～15分も歩くとロンガ・バンジャンの峠(2187m)を目指してのトレイル登高となる。峠に12時半に到着し、パッティ(茶店)で昼食をとり、チャウラツター(2305m)の幕営地に14時に到着した。

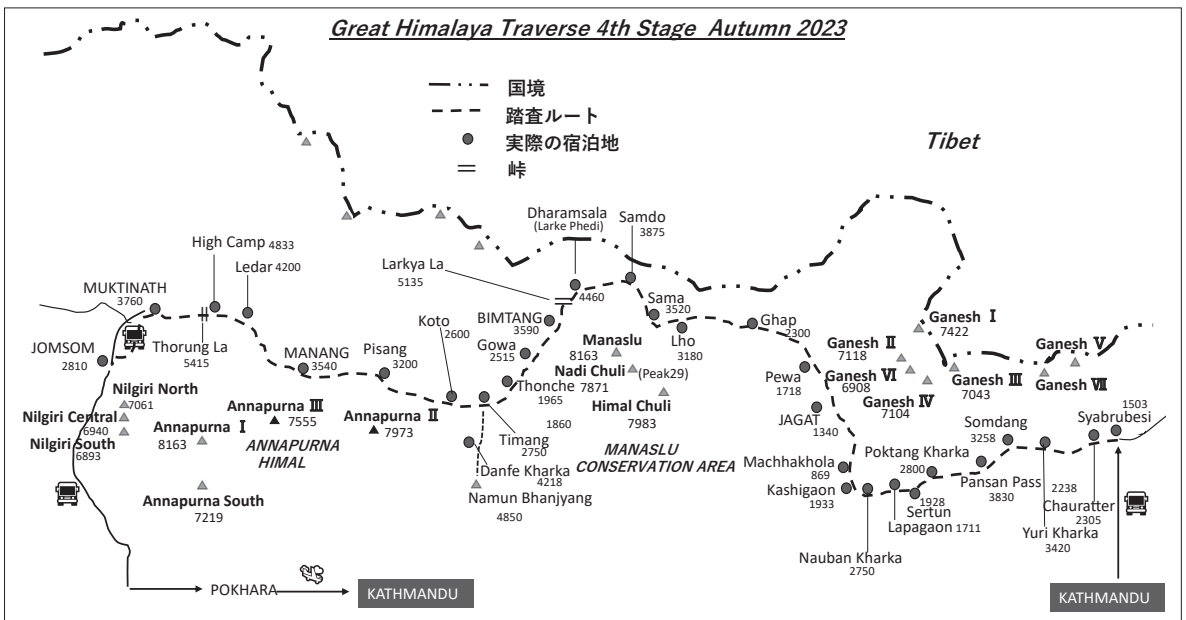
ここから北方に見えるチリメ・



ラバ・ガオンへの道中から見たガネツシュ・ヒマール

コーラを眺めていると、現在は中国領土となっている川の上流に位置するサンジェン・カルカ(放牧地)への旅(71年と79年の2度にわたってガネツシュ・ヒマールの懐に入境)の記憶が蘇ってきた。現在はチリメ・コーラが西方向へ大きく向きを変え、同時にV字溪谷からU字状カールへ変化する辺りに所在するムル・カルカから上流はチリメ・コーラ自体が国境となっているため、一切入ることができなくなっており、時代の変遷の大きさを感じざるを得ない。この幕営地から眼下に視認できるチリメ・コーラ下流を挟んで対面する尾根の南西面には、湯量豊富な温

Great Himalaya Traverse 4th Stage Autumn 2023



泉(タトパニ)があり、現在はホテルも建設されて多くのトレッカーが訪れているとの由。

13〜14日チャウラッター・ソムダン

ガネツシュ・ヒマールは、東側のトリスリ川と西側のプデ

イ・ガンダキ(川)に挟まれた位置にあり、ガネツシュI峰(7422m)を盟主として7000mを超えるII峰、III峰(7043m)、IV峰(Pabil, 7104m)と、6000m級のV峰(6770m)、VI峰、VII峰が立ち並ぶ山塊である。

G・H・Tトレイルはこの山塊の南面を東西に横切っており、その中央に小規模の川(マイルン・コーラ)があり、この川を遡るとパルドール(5860m)のベースキャンプに到達する。このパルドールから南へ派生するクウルプ尾根(東側)とパンサン尾根(西側)に挟まれた川が、すなわちマイルン・コーラで、ガネツシュ・ヒマールのG・H・Tトレイルでは、マイルン・コーラを挟むこれら2本の尾根の乗越しが要となる。

13日は、ガトランというタマン族が多数を占める大きな集落には寄らず、ユリ・カルカ(約3400m)まで進んだ。途中には、大がかりなタルチョー(祈禱旗で飾られた沐浴場やチーズ工場、大きな道祖神まがいの石像などがあり、タマン族の中心地区に相応しい繁栄ぶりを感じる。71年当時からこの辺りで鉱物採掘の可能性の噂話を聞いており、現在は実際に稼働しているとのこと。そのLar. 鉱山までの車道開通に起因した繁栄だと推測する。ユリ・カルカには14時半に到着した。

14日は8時前に出発してクルッブダンダ峠(3710m)に9時

半に到着。そこから緩やかな下り坂を快適に下降し、途中から車道へ出て、12時にはソムダン(3258m)に到着した。この集落が前述のマイルン・コーラ河畔に位置しており、この集落がパルドールBCへ2日ほど入れる最終集落となる。

15〜17日ソムダン・パンサン峠・セルトウン

ソムダンを8時に出発するが、半袖シャツでは寒い。車道を10分も歩くと、車道から外れて旧歩道に入り急登が始まる。そして、15分くらいの急登をこなすとまた車道に出くわすという場面が連続し、車道を何回クロスしたか数えきれなかったが、パンサン峠(3830m)まで2・5kmの3600m地点に9時45分に到達。ここから車道が長く続き、パンサン峠に12時10分に到着する。

ルート概念としては、ソムダンからパンサン尾根の最低鞍部(パンサン峠)を目指して尾根の東側面をトラバースするルートで、途中で東方にランタン・ヒマールが遠望できる。パンサン峠からは西方にパウダや美しい姿のヒマルチ



子どもたちがブランコで遊ぶラパ・ガオンの集落

ユリ、ピーク29が遠望できる。

16日は、8時前にこのパンサン峠を、寒風を受けながらティプリン目指して下降開始。ほどなくパビルとGⅡ(旧名)が眼前に現われ、雄大である。ポクタンと称されるカルカ(約2800m)に11時過ぎに到着、幕営することにした。洗濯をして衣類を干したが、14時ごろから激しい雨となり夕刻時には雷雨。洗濯物は乾くどころか逆に重くなり、全くツキがない。この雨は翌朝まで続き、6時半ごろやんだ。

17日は7時50分に出発。周りの山々は3500m以上の部分が白くなっている。昨夜来の雨が上部



ノーバン・カルカから遠望したヒマルチュリ(右)とパウダ

では雪であったことを表わしており、昨日越したパンサン峠も白くなっていった。出発時は曇りだった天候も次第に太陽が顔を出し、ややぬかるんだトレイルも乾き、快適に下降する。10時過ぎバツティでひと休み。さらに段々畑が美しく見える車道を進み、通学する子どもたちと数多く挨拶を交わしながら田園風情を楽しむ。13時過ぎにセルトゥン(1928m)に到着した。

18日は休養日なので、ロッジの部屋で2連泊となる。昨夜の激しい雨で雨季シーズンも終幕となった、とのニュースがラジオ放送で流れた。

19〜20日セルトゥン〜ノーバン・カルカ

セルトゥンを7時45分に出発、ボラン集落方向へ下降する。11時過ぎにアンクー・コーラに架かる橋(1230m)を渡り、ラパ・コーラ左岸沿いに進むトラバース道をたどる。森林帯の中で茶店が現われ、コココーラにありつき飲んでいると、ウリと見間違うほどの大きなキュウリをただで提供してくれた。ラパ・コーラを右岸に渡る橋を経てラパ・ガオン(集落)の外れにある学校に14時15分に到着、校庭に幕営する。この時期は、ネパール国全体が「ダサイン」と称される大規模な祭りの期間に入っており、校庭内にテント設置も可能となった。

翌20日は7時50分に出発し、集落の中を歩く。各家庭ではダサインの準備に忙しく、水牛やヤギの解体現場を数多く見た。皆、楽しそうな顔で幸せそうだった。集落の外れから石段積みの登りが始まる。13時にマンガラ・バンジャン(2936m)を越し、16時過ぎにタルチョーはためくミャンガル峠(2975m)を乗越して、17時過ぎにノーバン・カルカ(2750

m)に到着した。

21〜22日ノーバン・カルカ〜マチャ・コーラ

今朝は快晴で明け、7時50分に出発。カルカから下降を始めるとすぐにヒマルチュリが出現、すばらしい眺めである。同時にピーク29も確認できたが、マナスルは遠方のため小さい。出発後、すぐにトレイルが左右に分かれており、いずれの道をたどるべきか検討する。結果は右方向に延びているルートを探り、リチェット・コーラに架かる橋(1230m)を渡り、ヤルサ尾根の高巻きルートをたどることになった。16時にカシ・ガオンの東端にある学校に到着。先行していたシエルパたちが校庭内に天幕を設営中であつた。

22日は8時15分に出発。カシ・ガオンはダサインの準備のため数ヶ所でヤギの解体をやっていた。9時過ぎになると、西方眼下に雄大なブディ・ガンダキが見えてくる。11時半にはブディ・ガンダキに架かる吊橋を渡って右岸に移り、13時にマチャ・コーラ(869m)のロッジに到着した。

(千葉支部会員)

REPORT

遥かなりアニデッシュ・チュリ

〈2023年秋、明治大学山岳部登山隊の記録〉

隊長 天野和明

2023年ポスト・モンズーンにトライした未踏峰、アニデッシュ・チュリ(Anidesh Chuli、ホワイト・ウェイブ、6960m)には、力及ばず登ることができませんでした。今回の登山においては日本山岳会の助成金並びに明治大学父母会、炉辺会(山岳部OB会)からは多大なる援助をいただきました。ここに改めて御礼申し上げますとともに、登山の報告をさせていただきます。

登山隊発足の経緯

22年に明治大学山岳部は創部100周年を迎えました。それを機に、若手OBを中心にヒマラヤ遠征の機運が高まり、彼らの熱意に押される形で1999年度卒部の私も参加することになりました。最年少は19歳・現役2年生で、創部100年にして初の女性主将となった川嶋すず菜、大学4・5年生・23歳で、クライミングと動画撮影に情熱を燃やす川崙摩周、32

歳と一番脂ののっている宮津洸太郎、そして、久々のヒマラヤ復帰だが、過去にピオレドールを受賞し、国際山岳ガイドというプロフエッショナルとして活動している46歳のベテラン天野和明、59歳・山岳部監督の中澤暢美という、ある意味年代が整った5名のチームが発足しました。

全力で向かうことのできる山へ

しかしながら、目標とする山選びはやや難航しました。若手からは8000m峰へチャレンジしたいという声もありましたが、現代のヒマラヤ登山は大きく様変わりしています。それぞれのキャリアアップにはつながっても、山岳部のチームが発登ことの価値はなかなか見いだせない、難しい時代になりました。

人跡のあまり濃くない、西ネパールや東ネパールの国境付近を中心にリサーチし、結果的に、まだ未踏峰の多い東ネパールのカンチ

エンジュンガとジャヌーという2大スターに囲まれた山域にある未踏峰に目を付けました。トレッキング・ルートから遠くない場所にあるのに、山の陰という目立たない場所にあるがゆえに未踏峰として残り、また、過去に2度しかトライされていないアニデッシュ・チュリに決めました。

北壁からアルパインスタイルで

この山は謎が多く、南面に関しては、今の時代にインターネットですら出てきません。グーグルアースの画像を見ながら検討した結果、南面も偵察するが、本命は北面、北壁からできるだけ純粋なアルパインスタイルで登頂することを第一目標に挙げ、そのほか東稜、北稜を候補として現地向かいました。

ベースキャンプは4750m、川から1時間ほど入った左岸の砂地に設置しました。まずは両脇から落石、崩落の頻発する氷河の、実に歩きにくいモレーン上を右往左往しながら5kmほど奥に歩かなければなりません。時間にして片道4時間ほど入った、氷河が立ち上がる手前にABC(5200m)を



北壁の中間部を登る宮津隊員

設置し、アイスフォールと上部プラトールへと続くルートを探すことにしました。1度目のトライは右中央から。しかし、標高差で200mほど上がった所でクレバスを越えられずに引き返す。

2日目、2度目のトライはより右側から。これも懸垂氷河をあまりくじを引くように標高差で450mほど上がり、プラトールに入りがけるほんの手前で越えられない幅のクレバスに阻まれ、振り出しに戻る。しかし、このときドロローンを使って上空から偵察した結果、左に大きく迂回すればルートがかなりそうなのことが判明します。

3日目、3回目のトライは氷河の崩壊リスクを少しでも避けられ

るよう夜半から行動開始し、隊員の間隔も50mほど開けて左から大きく右上していくような感じでクレバス帯を突破。大きなクレバスにはスノーブリッジがあり、うまく全てがつながり5840mの上部プラトー入り口に到達、北壁を間近に眺めることができました。

届かなかった山頂

10月15日、暗いうちからアプロ



アニデッシュ・チュリ北壁と登攀ルート

ーチを開始し、取付のシュルントで準備の後、宮津リードで誰も触ったことのない北壁に取り付きます。思っていたよりも岩には節理が少なく、支点を作るのに時間がかかりました。スラブ状の岩は傾斜が緩いため騙し騙し登っては行けるのですが、ランナウトを強いられ、時間がかかりました。このままでは今日中に登頂して下りてくるのは難しい。ビバークしてでも

登り切る覚悟で準備をしていましたが、北壁に日が差す時間はわずかで、スノーシャワーを浴び続けていくうちに、このままビバークしたら指や体は持つのか？ という懸念も湧いてきました。

結果的に、取付から600mほど登った6600m付近で敗退。一度下降して、セカンドチャンスを狙うということになりました。原因は力不足。天気や山の状態は良く、単純に我々の力、経験が足りなかった……。初海外登山の川寄には経験がなく、宮津もヒマラヤ経験

はあるものの、悪い氷河や大きな壁を登った経験に乏しく、また、天野も壁の半分を全てリードして引っ張っていくほどの余力がありませんでした。

翌日から残る2つのルートの1つであり、技術的困難度は一番易しそうな東稜への道筋を探るべく氷河をラッセルし、東稜のコルまで標高差200mの所まで登高しました。ただし、この斜面が風下側の北向き、斜面下にはクレバスがあり、上には懸垂氷河があり、大きな漏斗状の雪崩地形でした。親しい先輩や後輩が亡くなった08年のクーラ・カンリの雪崩事故のことが頭から離れず、また、僕らの姿はBCからも見えないため、もし雪崩で流されて3人とも埋まるか、クレバスに落ちて痕跡もなくなってしまうたら……。そんなことが脳裏から消えず、この選択肢は放棄することにしました。

いつの日か再チャレンジを

自分たちの理想とするヒマラヤ・アルパインスタイルと、現時点での実力が乖離していました。6600mという到達した高度だけ見ると、もうちょっとで山頂な

のに、とも見えますが、実際に現場ではかなりの力不足を感じました。若い2人にはまだまだやりたいという気持ちがあったと思います。でも、突っ込む前に保守的な判断をしました。隊長の判断に異を唱えることなく従ってくれた2人に感謝するとともに、物心ともに応援してくれた皆さんに申し訳ない気持ちでいっぱいでした。自身でも10度目のヒマラヤのピークで初の敗退。打率10割を続けることはできないと分かっているながらも、やはり悔しく、これまで登ったどのピークよりもアニデッシュ・チュリは印象に残っています。情報過多の現代において、ヒマラヤの未踏峰に、それもまだ手付かずの美しい壁から挑戦できたことは大きな喜びでした。この山は、この壁は登れない山、ルートではない。いつか、そう遠くない未来に登り切るチームが出てくるでしょう。一度手を付けた山だけに、それが自分か、または山岳部の後輩であれば、と願います。またヒマラヤに戻って、輝ける山を登りたい、そう強く思っています。

(明治大学山岳部OB・国際山岳ガイド)

連載■文庫本でも楽しめる

山の名著再読

(9)『原野から見た山』

(坂本直行者・朋文堂)

三栖寿生

本書の初版は1957(昭和32)年に朋文堂より出版された。少年のころの回想から昭和30年代の登山紀行までを、山岳画や植物のスケッチと一緒に綴った26編の画文集。北海道で生まれ、北海道の自然と山を愛した坂本さんを知る上で大切な一冊である。本の中の絵は、自然の近くにいるような親し

みを感じる。人のちよつとした姿も温かさを感じる。花は、普段何気なく見ている花がこんなにも美しかったのかと思う。

坂本直行さんは子どものころから自然の美しさに強い魅力を感じて山遊びや草花いじりに熱中し、



昭和32(1957)年初版発行

毎週のように札幌近郊の山に登り、山のスケッチをし、多いときは1日の登山で50枚も描いた。

北大山岳部時代は北海道の多くの山に登り、また、北海道の原野で長く開墾生活を送るなかで、日高山脈の絵を多く描いた。その絵は山の愛好者たちの心をとらえた。のちに茗溪堂から出版された本書の復刻版のあとがきに「私の人生の大半を過した、原野での生活の一端を綴った」と書いている。

山との出会いを回想する「僕の山の絵」。昭和5年24歳のとき、広尾村で牧場を経営する岳友から誘われて同地を訪れ、そこで日高山脈と原野の風景に魅了される。柏の立ち枯れや切株が散らばる広大な原野の風景に、次第に魅力を感じていく心の変遷を語る文章は若々しく、青春の感性を感じる。

北海道の広大な大地の魅力を感じさせる文章の「原野から見た山」。

厳しい原野の生活の中で、いつも心の支えとなった原野の自然への思いが感じられる詩「原野の歌」。花など植物の魅力を綴った「せんのきの芽ばえ」「はまなし」「こぶし」「あつもり草」。原野に残る踏み跡への思いを綴る「原野の道」。登山の紀行や随想の「武好の春」「築古岳の便り」「般若の五郎」「五月の十勝連峰」「思い出の断片」など。時計屋と農夫のコンビで登った「石狩の歌」や「斜里岳の旅」に出てくる独り暮らしの孤独な開拓民とのやりとりは、飾り気がなくおもしろい。本の中で目を惹くのは、原野の魅力や美しさを綴る部分である。

「明るい褐色の枯葉は天気や時間によって、いろいろな色調に変わり、まだ雪のない初冬のモルゲンロートは何とずばらしいことであろうか。原野をうずめる柏の枯れ葉はまるで燃えあがるようにさえ感ずるほど赤味がさし、白雪をバラ色に染めて連なる日高連山の、この上ない前景をつくりだしてくれる。」

坂本さんは岳友の農場で働いた後、昭和11年30歳のとき、広尾村

の原野に自ら土地を得て開墾生活を始めた。そして、火山灰地で収入の少ない土地での厳しい労働の合間に、日高山脈や植物の絵を描き続けた。「苦しい開墾生活に20数年耐えてきたのは、いつも新しい生気を吹きこんでくれた美しい日高山脈や原野の原始的な美しさのおかげもあるようだ。」と記す。

苛酷な労働であったが、美しい風景と絵を描くことで耐えてきたのだと思う。そんな坂本さんを通じていと思うと同時に胸が痛む。

一人の彫刻家がモデルを探して訪ねてきて、坂本さんの絵を見て画家になることを勧める。これがきっかけとなり24年間の開墾生活を離れ、画家となる。画家となった後も日高山脈を描き続けた。

著書にはほかに『山・原野・牧場』『雪原の足あと』などがある。併せて読まれるのも良いと思う。

遠い昔、サイン会だったのだろうか、坂本さんの前に順番に座り、対面したときの親しみある態度と笑顔、今も覚えている。

文庫版は、ヤマケイ文庫(2021年初版発行、税込み990円)で読むことができる。

(図書委員会委員)

(10)『雪山・藪山』(川崎精雄著・茗溪堂)

近藤雅幸

山のことを書いた本は数多いが、文学的な香りがするものを見かけなくなつてから久しい。特に最近ガイドブックやノウハウ本全盛で、山の文章から山の情景や山の人たちの心の動きが臉の裏に浮かんでくるような、表現豊かな文に出会うことはほとんどなくなつてしまった。

山の文芸誌『アルプ』が刊行されていた時代には、様々な登山愛好家が筆者となつて、文学情緒豊かな文を発表し、読者の心を打つような山の本を書いていたが、そういった登山愛好者は、いったいどこへ行つてしまったのだろう。そのころから時がたち、山の文学は衰退し、今やほぼ滅亡してしまつたように思えてならない。

山にまつわるもので、時の経過

雪山・藪山

川崎精雄

昭和44(1969)年初版発行

とともに滅んだり、消えてしまつたものは、ほかにも数えきれないほどある。たとえば、山のアプローチでよく見かけた、懐かしいような、心を憩わせてくれるような山村と、そこで生きる人たちとの温かな交流。歩いた人のぬくもりがまだ残っているような気がする細い峠道。そういったものも、今や心の中の記憶として懐かしく思い出されるだけになつてしまつた。『雪山・藪山』を手にとって、緋ひいてみると、そういった失われたものが、こぼれた水のように心の中に広がってくる。それと同時に、どこか切ない気持ちが喉の奥からこみ上げてくる。そして、そういった気持ちはどこか心を温かくしてくれる。

本書は川崎精雄まさおさんが、『アルプ』や月刊誌『山と溪谷』などに書いた随想や紀行を集め、まとめられた本である。全てが山にまつわる文だが、その表現や内容はまるで散文詩のよう。特に仲間との出会いや登つた山の記憶、麓の山村の情景やそこに住む人たちとの交流が、詩情あふれる言葉で綴つづられているのには、心を揺さぶられる。川崎さんは俳人でもあるが、句の言葉を選ぶように、本書の言葉を丹念に紡ぎ出しているからに違いない。

本書の舞台はほとんどが奥利根・南会津・西上州をはじめとする、マイナーな山である。私も歩いていて、よく知っている山々だが、特に気持ちが良いのが雪消の季節と紅葉の季節である。雪が消えつつあるときの淡いパステルカラーの彩りと、秋半ばに山やまに飾り付ける紅葉の美しさは、一度目にしたら忘れることができないほどの印象を心に刻み込む。

川崎さんは本書で、その情景の美しさを伝えるのに最もふさわしい言葉を選んで綴っている。だから、言葉と言葉の間から眼にも鮮やかにその情景が立ち上ってくるような気がするのだと思う。

ただ、そういった情景やそこでの人との触れ合いも、時の経過とともに、やがては『雪山・藪山』の文の中にしか残らなくなつていくのだろう。寂しい限りである。

実際、本書に出てくるものにもすでになくなつてしまつたものが

多い。本書や、本書の後に出了『山を見る日』に何度も登場し、川崎さんがこよなく愛した平ヶ岳登山口、鷹ノ巣の清四郎小屋も後継者が見つからず、今年か来年には閉めることになるようだ。

以前、本書中の「邂逅」の一節にあるコースをたどつたことがある。朝に見晴の松枝岐小屋を出て尾瀬ヶ原を横切り、山ノ鼻から至仏山に登つて狩小屋沢を下つたのだが、結局、狩小屋沢を下るのが精一杯で、川崎さんが歩いたときのようにその日のうちに湯の小屋温泉に到着するなど及びもつかなかった。川崎さんが歩いたときにはなかつた道や木道ができたりしていて、ただでさえ歩きやすくなつていて、ただでさえ歩きやすくなつていて、のにもかわらず、これである。

そこで分かつたのは、『雪山・藪山』に詩情豊かに描写されているコース。これは実はほんでもないものだぞ、ということだった。美しい文の裏側には、とんでもない健脚があつたのだと、身にしみて感じたのだつた。

文庫版は、中公文庫(1980年初版発行、税込み726円)で読むことができる。

(図書委員会委員)

追

OBITUARY

悼



上高地の親父を悼む

東 英樹

奥原教永先輩は、筆まめな高校の大先輩です。何度かお手紙をいただいています。懐かし、ありがたく思っています。2023年5月11日に天寿を全うされたとお聞きし、驚きと哀しみ、また、残念無念でなりません。

先輩は私が生まれた年、1949年に深志高校の1回生で卒業。明くる年50年から新生西糸屋山荘の家業に専念します。その年と翌



奥原教永(おくはら・きょうえい)

会員番号4711

1930年5月30日 安曇村(現・松本市)

島々に生まれる

1949年 松本深志高校卒業

1950年 上高地西糸屋に専念。高松宮の乗鞍コロナ観測所訪問に同行

1952年 新雪の剣岳へ。小山義治同行

1955年3月 利尻山南稜初登攀に同行

1959年 南アルプス南部縦走

1972年 信濃支部アンナプルナI峰の偵察隊長で6000mまで登る

1974~84年 信濃支部第5代支部長

1985年3月 利尻山東稜

1988年3月 知床岳に宰、岡田昇と登る

1995年 西糸屋を宰にまかせる

2023年5月11日 逝去、享年92

年の冬に上高地越冬暮らしを体験。このころから二、三の大学山岳部と長いお付き合いが始まりました。また『山靴の音』の著者・芳野満彦さんや岩稜会の石岡繁雄さんとも知り合いで、我々は羨ましく思っていました。これが先輩の原点、ベースでしょうか。親父(英男)さんの時代から培われてきた登山者や学校山岳部員らとの親交と、彼らに対する配慮から「山に対する深い愛情の持ち主で、上高地の親父」と言っても過言ではないと思います。

55年3月、利尻山南稜冬期初登攀に北穂会のメンバーとして加わり、南稜に1ヶ月もへばりつき、仲間3人が初登攀に成功。これ以来、利尻山に惚れ込み、3度も訪れています。85年3月には、息子の宰さんと東稜から利尻山に登っていますが、息子さんがパートナーとは、羨ましい限りです。また、北の大地のほかの山にも足跡を残しています。知床半島の山々に何度も通い、「低気圧の墓場」で大風雪の中を羅臼岳や硫黄山、知床岳、遠音別岳に登頂。まさに岳人、不屈の山男と言えましょう。

また、72年には信濃支部アンナプルナI峰登山の偵察隊長として6000m付近まで登りましたが、明くる73年のアンナプルナ登山隊は隊員4名、シェルパ1名が雪崩で遭難しました。遭難後、意気消沈している支部の立て直しや懸案のアンナプルナの報告書、『信濃支部35年誌』の発刊にお骨折りのいただき、頭の下がる思いです。

西糸屋は歴史が古く、昭和3年の旅舎開業時は「山宿 西糸屋」、昭和25年の増築時からは「上高地山荘 西糸屋」、さらに創業50周年記念を機に「上高地西糸屋山荘」へ

と変遷しています。現在玄関に掛けられている看板は、山岳写真家・田淵行男の揮毫ですが、多くの岳人や画家、写真家が西糸屋に宿泊し、上高地を起点に活躍したのは、西糸屋および先輩との固い絆があったからで、感慨深いものがあります。

幼少のころより上高地を我が庭のように親しみ、47年からはスキーを始めています。「スキーはうまくない」と言いながらも上高地を起点にツアーを実施、体力とともに捻挫一つしてはならないという注意力、雪崩への判断力などが最重要と説いていました。慎重で謙虚な姿は、見習うべきことが多々ありました。

また、スキーを履いてお父様と奥様、息子さんたちと、ご家族で出かけられたことに先輩の家族愛や絆を感じ、そういうことができることを羨ましく思ったものです。もともと上高地の今昔物語や北の大地、北の孤島の山談義もしたかったのに、残念でなりません。山を知り尽くし、上高地を守ってこられた「親父」に感謝、ご冥福をお祈りいたします。

(信濃支部長)

支部

だより

全国各地の支部から、
それぞれの活動状況を、
北から南へとレポート
します。

東京多摩支部

「山の天気ライブ授業」の
セミナーとフィールドワーク
を開催

東京多摩支部では、山岳気象の第一人者である猪熊隆之氏をお迎えして、「山の天気ライブ授業」を開催した。1日目は3時間の講義、2日目は奥多摩の御岳山、日ノ出山で観天望気のフィールドワークを行なった。なお、この企画は日本山岳会支部事業委員会からの支援を受けて実施された。

12月9日の講義は東京都立多摩図書館のセミナールームで開催され、会員以外の方も含めて71人が参加した。猪熊氏は資料「気象遭難を防ぐための天気の見方」に基づいて講義を進めた。一般の天気予報は平地や山麓のもので、山頂と山麓の天候が異なるときに気象遭難が多発しやすく、遭難を避ける

ために天気について学ぶ必要があるとのこと。また、登山ルートによっても気象リスクは異なるので、安全なルートを選択する必要がある、と述べた。

猪熊氏の卓越した点は、予報に地形を織り込んだことだろう。山の天気の基本として、天気が崩れるのは雲ができるからであり、上昇気流が発生する場所、特に湿つ



日ノ出山頂上での記念撮影

た海側から吹く風の風上側の山で天気が崩れるので注意が必要とのこと。山では平均風速15%以上のときにリスクが大きくなるという。風は天気図から風向きと強さを読み取れ、危険な風が吹く状況を天気図と実際の事例で解説した。

実際、数件の低体温症遭難が発生した日の気圧配置は同じだったことを示した。登山中は観天望気が重要とのこと。雲の種類を紹介した。落雷と局地豪雨は上空に寒気、下層に暖かく湿った空気がある場合に起こるそう。落雷からの身の守り方も紹介した。危険な状態を察知したときの引き返しポイントの設定も大事とのこと。関東甲信越の山の配置と天気図から風の向きが予想でき、特定の山域の気象の危険性が示された。広域的に予想を立てられることに驚いた。

翌10日は御岳山駅前広場に30名が集合した。資料「空見リスクマネジメントマップ」、「十種雲形」、「直近の天気図」が配布された。まずは猪熊講師から、「何か気候で気が付いたことがありますか?」と問われ、「山麓よりこの方が気温が暖かい」という声があった。

講師は我が意を得たりという感じで、「放射冷却で下の気温が低く、上が暖かい極めて安定した天候」と解説し、山風が吹き下ろす安定した気候を体感することができた。これからは、外気の温度から気象状況を感じ取ることが習慣になりそう。

ここから日ノ出山を経て三ツ沢までの5ヶ所の観測ポイントで、空と雲を観察して観天望気の予定だった。しかし、頭上には蒼天が広がり、絶好の山行日和だった。つまり、空には数本の飛行機雲が見えたものの、期待した低・中・高層雲は、一片も見えなかった。

講師によれば、これは観天望気に「致命的」とのことだった。そのようなわけで、雲に基づいた観天望気は十分にはできなかったが、講師のお人柄を反映するような和気あいあいとした雰囲気、歴史も含めてもろもろのフィールドワークを楽しんだ。

2日間で、気象の重要性和観測方法、それに基づく行動指針を学んだ。今後の山行に活かしたい。

(東京多摩支部総務委員会委員・辻正人)

東九州支部

九州5支部集会和山の安全を祈る集い開催

「第3回九州5支部集会」と「第14回山の安全を祈る集い」が東九州支部主催で令和5年8月5日・6日に法華院温泉山荘で開催された。九州5支部集会は平成27年に宮崎支部、平成29年に北九州支部で開催され、次は平成31年に東九州支部で開催予定だったがコロナ禍などのため延期され、今年で3回目の開催となった。

福岡支部10名、熊本支部11名、宮崎支部4名、北九州支部5名、東九州支部29名、記念講演会講師として日本山岳会理事／千葉支部長・松田宏也さんの参加で総勢60名となった。

集会は1000人収容の法華院温泉山荘の大部屋で13時30分より、まず東九州支部・安東桂二支部長の「九州5支部集会の意義は、九州各支部の発展と交流と考えます。この九州5支部集会でそれぞれの支部の活動や課題などを話し合い、交流を深めたい」との挨拶で始まり、それぞれの支部の活動報告と課題の発表があった。



法華院温泉山荘前での5支部会員の集合写真

福岡支部の渡部秀樹事務局長から、会員の高齢化とそれに伴う会員減少が一番の課題で、夏山フェスタin福岡の主催や古道ロングトレイルの共同踏査、山のトイレ協議会と合同の清掃登山など、ほかの山岳関係団体との共同で行事を行なっているとの発表。

熊本支部の土井理支部長が会員増加の対策としてホームページ作成や一般登山者向けの登山教室などを検討中であること、また、会員の親睦を図るため新春晩餐会や夏のビールパーティなどを開催、同好会活動として花を愛でる会、写真同好会、里山低山クラブなどを設けていることなどを発表した。

5月の神奈川にて
全国支部懇談会を開催

神奈川支部は、令和6年5月25日・26日に神奈川県平塚市において、第37回全国支部懇談会を開催します。今回は、初日に日本山岳会設立に多大な功績のあった岡野金次郎氏を顕彰し、岡野金次郎碑前祭(第1回)を平塚市湘南平で計画しています。全国から皆様のご参加をお待ちしております。

主管 公益社団法人日本山岳会神奈川支部

期日 令和6年5月25日(土)・26日(日)

参加資格 会員、準会員、および会友(予定人数150人)

宿泊 グランドホテル神奈中

平塚 〒254-0811

1 神奈川県平塚市八重

咲町6-18 ☎0463

123-0300

宮崎支部は日高研二支部長より、家族登山や宮崎家庭裁判所少年補導委託登山、宮崎ウェストン祭などを実施、また、できるだけ多く

交通 東京駅からJR東海道本線で平塚駅まで約55分。

羽田空港から京浜急行(特急)で横浜駅まで約30分、同駅からJR東海道本線で平塚駅まで約30分。

参加費用 2万円(1泊2食、26日の弁当代)

申込み 1月9日～2月15日

日程 1日目12時30分から受付開始、13時から湘南平

に出发、15時から岡野金次郎碑前祭、18時30分

から懇親会 2日目6時

30分から朝食開始、8時

から交流登山出発

①登山A三浦アルプス

②登山B鎌倉大仏ハ

イキング、③自由行動

問合せ 日本山岳会神奈川支

部事務局長 永井泰樹

taiju.forever@knj.jp

highlobe.jp

(神奈川支部長・込田伸夫)

の会員が参加できるようハード、

ソフトの登山計画を立てていると

のこと。

北九州支部は清家幸三事務局長

から、横有恒碑前祭や英彦山清掃登山、家庭裁判所ハイキング・サポート、幼稚園児見守り登山、バスハイキング、ポレポレ山行などの活動報告があった。

東九州支部は安東桂三支部長が登山入門教室、青少年体験登山、登山研修会、清掃登山、スズタケ枯死とシカの食害調査などの活動を発表した。

どの支部も会員の高齢化と会員減少、若い新入会員獲得の難しさが課題だった。時間の関係で課題を解決するための議論を深めることはできなかったが、皆同じ課題を抱え、その中でできることを工夫しながら頑張っている姿を知ることでの刺激となり、励まされたことと思う。

写真撮影の後、「山の安全を祈る集い」。昭和5年の遭難から現在まで、加藤英彦・東九州支部前支部長の講演。そして、「生きて還って、また登る」〜ミニヤコンカ生還から41年の歩み〜 松田宏也 日本山岳会理事／千葉支部長の2つの講演があった。

翌6日は九重御池そばの丘の上に建つ慰霊碑前で、山の安全を祈る集いと慰霊法要の予定だったが、

前夜からの激しい雨のため中止となった。そのため法華院温泉山荘の大部屋で九重山法華院白水寺・弘蔵岳久院主による慰霊法要が行われた。



羽根田治著



2023年7月
山と溪谷社
188mm×118mm 144頁
1300円＋税

登山をはじめとする「アウトドア」には、必ず伴ってくるものがある。それは「危険」だ。ときにはそれが生命に関わるものであることもある。本書は登山、キャンプ、釣り、山菜狩り、キノコ狩り、海水浴、ボートなどの様々なアウトドア・アクティビティ中に実際にあった事故例を短く、大きな文字で

最後に東九州支部の歌とも言える「坊がつる讃歌」を1番から9番まで歌って全ての行事を終えた。
(東九州支部副支部長・下川智子)

図書紹介

分かりやすく紹介した上で、「死なないためには」というタイトルで5〜6行程度の解決法を説明するという構造で、各種アウトドア・アクティビティで起こり得る危険について、事例を通して説明している。

内容は、第1章が「山で死ぬ」、第2章が「動物にあつて死ぬ」、第3章が「毒で死ぬ」、そして、第4章が「川や海で死ぬ」である。山を志す者にとつては、第1章はもちろんのこと、それ以外の章も大変参考になる事例が多く紹介されており、短いゆえにすぐに読める内容であるから、ぜひひと通り目を通しておきたい一冊である。このよ

寄附金および助成金などの受入報告(11月まで)

寄附者など	受入金額など (単位千円)	寄附の目的、その他
石川 春 会員	50	登山道等山岳環境整備のための寄附金
竹内 佳美 会員	50	森林づくり活動に対する寄附金
桐生 恒治 会員	100	常務理事会、理事会活動の運営費として
大森 弘一郎 会員	100	雷鳥保護活動寄附金
宮下 友樹 様	12	登山道等山岳環境整備のための寄附金

うに、アウトドア全般を広く扱っているがゆえ、広く浅いという印象を持ち、少し物足りないと感じる読者もあるかもしれない。しかし、そのような読者向けに同じ著者らが著した著書を巻末で「本書を読んだ人にオススメの本」として紹介しているので、その中から興味のあるものを選んで読めば、さらに知識を深めることができる。

まず、第1章では転倒、滑って落ちる、落石など、歩いているときに起こり得るものをはじめ、テントの中で一酸化炭素中毒で死亡した例や火傷で死にかけた例、さらには火山ガスによる死亡事故な

ど、多岐にわたる山での危険とそれに対する対策を書かれている。

第2章で、山ではクマ、イノシシ、毒ヘビ、海ではサメ、オニヒトデなどの危険な生物を陸海両方紹介しているのが特徴である。続く第3章の「毒で死ぬ」は、一見すると、山歩きとは関係ないように思えるかもしれないが、中には山菜やキノコを山で採って楽しむ登山者もあり、不十分な知識でこれらを採って食べてしまうと生命に関わる事故につながる事が警告されている。こちらの章も山のみならず、海のものについても取り扱われている。

第4章の「川や海で死ぬ」は、直接山歩きとは関係ないものの、山歩きの中では、川を通る所もあり、冒頭で紹介されている「鉄砲水で死ぬ」や「ため池に落ちて死ぬ」は山歩きの中でも出くわす可能性の高い事故である。

山を歩くということは「自然」が相手であり、そこには危険が伴うが、それを正しく理解して、思いっきり山歩きを楽しんでいただくための一助になる、初心者にもお勧めの一冊である。

(床田真理)

図書受入報告(2023年11月～12月)

著者	書名	頁/サイズ	発行者	発行年	寄贈/購入別
石田 良恵	一生、山に登るための体づくり : 何歳からでも始められる筋トレ・ストレッチ	128p/22cm	ADDIX	2022	著者寄贈
服部 文祥	北海道犬旅サバイバル	253p/20cm	みすず書房	2023	出版社寄贈
黒田 未来雄	獲る食べる生きる : 狩猟と先住民から学ぶいのちの巡り	256p/19cm	小学館	2023	出版社寄贈
高橋 雅紀	分水嶺の謎 : 峠は海から生まれた	416p/21cm	技術評論社	2023	出版社寄贈
宇井 忠英	火山の仕組み : 現場で熱を感じ探る	304p/21cm	ベレ出版	2023	出版社寄贈
木暮 理太郎	山の憶い出 : 紀行編/ヤマケイ文庫クラシックス	640p/15cm	山と溪谷社	2023	出版社寄贈
齋藤 繁	一生登れる体をつくる食事術 : 院長が教える/ヤマケイ新書	240p/18cm	山と溪谷社	2023	出版社寄贈
神長 幹雄	未完の巡礼 : 冒険者たちへのオマージュ/ヤマケイ文庫	383p/15cm	山と溪谷社	2024	著者寄贈
上野 千鶴子	ハゲ岳南麓から	152p/19cm	山と溪谷社	2023	出版社寄贈
内山 岳志	ヒグマは見ている : 道新クマ担記者が追う	104p/26cm	北海道新聞社	2023	出版社寄贈
山口 美智子	天空の限界集落 : 秩父・浦山・太田部・大滝]に生きる人びと	368p/20cm	一葉社	2023	出版社寄贈
坂本 明裕	キャンプセラピーの実践 : 発達障児の自己形成支援	248p/21cm	道と書院	2023	出版社寄贈
稲葉 俊郎	山のメディスン : 弱さをゆるし、生きる力をつむぐ	298p/19cm	ライブサイエンス出版	2023	出版社寄贈
星野 秀樹	雪のくに移住日記 : プナの森辺に暮らす	172p/21cm	信濃毎日新聞社	2023	出版社寄贈
長谷川 敦	ようこそ! 富士山測候所へ : 日本のてっぺんで科学の最前線に挑む	194p/19cm	旬報社	2023	出版社寄贈
大野 崇	山と人 : Massif du Mont-Blanc III Moutagnes et Gens	96p/29cm	日本写真企画	2023	出版社寄贈

角幡唯介著

裸の大地 第二部 犬橇事始



2023年7月
集英社 360円
四六判 2300円+税

この本は、「裸の大地」というシリーズの第二部に当たる本。2022年に出た第一部の『狩と漂泊』では「日本では漂泊登山ができないのだろうか」と角幡さんは試行錯誤をする。漂泊とは、目的地を定めず土地から土地へ旅をするのだ。

登山は、普通は登頂達成へ向けて計画的に行なわれる。彼はもつと自由な登山をしたいと考えて、それを漂泊登山と名づける。

結局日本での漂泊登山を諦め、グリーンランドへ出かけることになった。

そしてさらに、狩をしながら自由に極北の地を動き回るには、犬橇が必要だと気づく。それが第二部の『犬橇事始』につながるのだ。

角幡さんにとって、犬橇は初めての経験だった。それだけで、書

かずにはいられないようなことがたくさん起きてしまった。

最初の1年は、一瞬たりともイヌたちを可愛いと思ったことはな

いと書いている。

「くそ、またあの犬に逃げられた。俺はね、犬橇をはじめてから犬のことを一瞬たりともかわいいと思

ったことがない。(中略)喧嘩しか能のないクソ犬ばかりだ。よく橇

を引く犬は良い犬だと思うけど、かわいとは思わない。それどころ

か、こいつらいつか全員ぶつ殺してやるとしか思えないね。こっ

ちの人はね、そんな犬はもう始末しちまえ、つてよく言うけど、そ

の気持ちがよくわかるわ。ウヤガンの野郎……腸が煮えくりかえる

とはこういうことをいうんだな。生まれてはじめてわかったよ。ク

ソつたれが、本当に……」と奥さんに電話で愚痴を言う。

怒り狂っていた角幡さんだが、次第にどのようなことがきつかけ

でイヌたちが喧嘩をするのかも分かってくる。そこまで時間が掛かるのだ。

だから、この本の最初の方は、すぐに喧嘩をするイヌたちの話ばかりで、読む方もまたかと思うこと

だろう。

エスキモーの人たちにとって、

イヌはペットではない。労働の道具なのだ。役に立たないイヌは、す

ぐに殺してしまう。

角幡さんも、イヌはペットではないと分かっているが、エスキモーのようなドライな心にはなかな

かなれない。

後半、角幡さんは自分の犬橇チームに手応えを感じるようになってと書いているが、それは、イヌたちの成長というよりも角幡さんの成長なのだろう。

そして、最後までイヌの話が続くのだ。

(北島洋二)

会務報告

令和5年度第10回(12月度)理事会

議事録

日時 令和5年12月14(木) 19時00分

分 21時10分

場所 集会所およびオンライン

(Zoom)

【出席者】橋本会長、永田・桐生・

飯田副会長、長島・南久松・

平川各常務理事、松田・池

田・望月・原田・猿渡・久

保田各理事、佐野・石川各

監事

【欠席者】川瀬理事

【オブザーバー】節田会報編集人

【審議事項】

1・退職金規定の制定について

(南久松) (賛成13、反対0)

2・高額寄附(森武昭会員、斎藤惇

生会員)の受け入れについて(南久

松) (賛成13、反対0)

3・JMSCAからのUIAA記念事業への協力依頼について(長

島) (賛成13、反対0)

4・「改革事業推進委員会」と「再

生事業推進WG」の廃止について

(平川) (賛成13、反対0)

【協議事項】

- 1・支部連絡会の結果について協議した(長島)
- 2・「みんなの日本山岳会」構想に関連して協議した(永田)
- 3・入会金の見直しについて協議した(長島)
- 4・入会手続きの見直しについて協議した(永田)
- 5・今後の予定(予算、事業計画、ヒアリングその他)について協議した(長島)

【報告事項】

- 1・入会承認報告(橋本)
- 2・寄附金および助成金受入報告(南久松)
- 3・団体登山保険の更新について(南久松)
- 4・商標権の更新について(長島)
- 5・晩餐会の結果について(長島)
- 6・安藤財団への全国山岳古道調査に関する助成依頼について(永田)

【その他】

- 1・会報「山」12月号の進行について(節田)

ル
ー
ム
目
誌
12月

1日	総務委員会
4日	首都圏活性化チーム
5日	公益法人運営委員会 スケッチクラブ
6日	記念事業委員会(全国山岳古道調査) 山行委員会
7日	常務理事会 YOUTH CLUB委員会 山岳地理クラブ
8日	図書委員会
11日	エクアドル隊 アルパインスキークラブ
13日	休山会 山想倶楽部 かつぱの会
14日	理事会 グレートヒマラヤトラバース 九五会
15日	自然保護委員会 創立120周年記念事業委員会
16日	アルピニズムクラブ 山の自然学クラブ
18日	総務委員会
19日	麗山会 バックカントリースキークラブ
20日	つくも会 三水会 平日クラブ
21日	科学委員会 山遊会
25日	資料映像委員会
26日	支部事業委員会 エクアド

28日 ル隊 00会
記念事業委員会(コーカサスの桜)
12月来室者 265名

会員異動

物故

近藤哲也(5044) 23・11・21
高橋英彦(5193) 23・11・12
小野貴司(5700) 23・12・11
山崎郁郎(6201) 23・11・5

退会

原田雅弘(10833)
林 正樹(12262) 京都・滋賀
森永貴子(12976) 信濃
前田正行(13043) 北海道
忍田和子(13497)
鎌倉淑子(14387) 千葉
大城和恵(15678) 北海道
青木美矢子(16154) 群馬
井坂 茂(16562)
大和田篤(16819) 京都・滋賀

INFORM
O R M
インフォメーション
A T I N
O

◆GO TO山岳祭 小島烏水祭
と香川県最高峰・竜王山登山
山行委員会

高松で開催される小島烏水祭に参加し、翌日、香川県最高峰である竜王山に登山します。

日程 4月6日(土)〜7日(日)
集合 4月6日(土) 11時高松駅改札口付近

行程 6日⇨高松駅⇨登山口⇨峰山公園(小島烏水祭)⇨高松

市内(懇親会) 7日⇨高松市内⇨竜王山⇨登山口⇨高松市内 15時解散
歩程 6日⇨1時間 7日⇨3時間
費用 2万円(宿泊費、現地交通費、懇親会費ほか)高松までの交通機関は各自準備
定員 10名程度
申込み 3月1日まで 長島泰博

☎ 090-5554-83

45 ☒ sanko@jac.or.jp

*申込み受付後、詳細を参加者にお知らせします。

◆台湾五岳・秀姑巒山

山行委員会

台湾五岳の中で、最も難易度の高いと言われる秀姑巒山(3829m)に挑戦。手付かずの大自然を満喫します。ツツジとジャクナゲが見ごろです。東埔温泉も楽しみです。

日程 5月24日(金)～5月29日(水)

5泊6日

集合 24日(金) 羽田空港8時50分

行程 24日 羽田⇌台北⇌集

(泊) 25日 八通関登山口

—観高(テント泊) 26日

—中央金鉱小屋(泊) 27日

—中央金鉱小屋—秀姑巒山

—中央金鉱小屋(泊) 28日

—中央金鉱小屋—八通関登

山口⇌東埔温泉(泊) 29日

⇌台北⇌羽田

歩程 2日から9時間、6時間、12

時間、12時間(健脚向き)

費用 約33万円(交通費、宿泊代な

ど)

注意 1日当たりの入山人数制限

があり、2ヶ月前の抽選に

なります。3月5日までに

パスポートナンバーと一緒に

に申し込んでください。パ

スポートのコピーが必要に

なります。

定員 8名(先着順)

申込み開始日 2月1日～3月5

日まで 数見 直 ☎ 0

90-7204-4668

☒ sanko@jac.or.jp

◆全国山岳古道調査関連講演会

埼玉支部

演題

『日本九峯修行日記』で辿る

近世関東の霊山—とある修

験者のまなざし— 泉光院

という修験者が、日本中の

霊山を巡ったときの報告書

『日本九峯修行日記』を基に

した講演です。

講師 埼玉県立嵐山史跡の博物館

主任学芸員・関口真規子氏

日時 2月18日(日) 10時～12時

(受付9時30分)

場所 埼玉会館7A会議室 JR

浦和駅(西口)下車徒歩6分

参加費 無料

募集 100名(申込み順)

申込み 2月11日(日)まで 埼玉支

部・事務局長 林信行 ☎

080-2256-4829

☒ stm@jac.or.jp

◆第33回 山好きの山の絵展

アルパインスケッチクラブ

この絵展は毎年2月に開催して

おり、今年度は第33回として開催

します。

50人の会員が実際に登り、見た

山々を描いた作品で、水彩画、油

彩画、版画など約50作品と、スケ

ッチブック10点近くを展示します。

毎年山好きの方々ほか、多くの方

にご来場いただき、好評を得てい

ます。皆様のご来場をお待ちして

おります。

会期 2月18日(日)～2月24日(土)

10時～18時(初日は11時45

分から/最終日は16時30分

まで)

会場 JR有楽町駅前・東京交通

会館 2Fギャラリー 千

代田区有楽町2-10-1 ☎

03-3215-7962 入

場無料

*今年と同館B1F エメラルド

ルームにて「6人展」を同時開催し

ます。

◆編集後記

●今月号の2ページ、原山教授の

「地質調査ルート図」には参りました。

このように地を這うような努

力をして地質図幅ができていた

は知りませんでした。私も学生時

代から剣・立山連峰の尾根や谷を

くまなく歩き、5万図にびつり

赤線を引いては悦に入っていました

が、とても足元にも及びません

(もつとも我々は遊びですが)。

●地形や地質は地味な印象が強く、

光が当たることがありませんでした。

ただ、近年は「プラタモリ」の

影響か、地学に興味を持ち始めた

人が増えていくように感じます。

「なぜ山がそこにあるのか」は登山

者にとって基本的な命題です。J

ACにもこの分野の専門家がいま

すので、もつと盛り上げていこう

ではありませんか。(節田重節)

日本山岳会会報 山 944号

2024年(令和6年)1月20日発行

発行所 公益社団法人日本山岳会

〒102-0081

東京都千代田区四番町5-4

サンビューハイッツ四番町

TEL 東京(03)3261-4433

FAX 東京(03)3261-4441

発行者 日本山岳会会長 橋本しをり

編集人 節田重節

Eメール:jac-kaiho@jac.or.jp

印刷 株式会社 双陽社